

蚕の夫婦は仲が良い

東京農工大学農学部蚕学研究室

准教授 横山 岳

私事ながら筆者は所沢に住んでいる。周りの市にはほとんど養蚕農家が残っていないが、所沢西部の小手指（こてさし）辺りには養蚕農家が残っている。所沢の地名の由来は在原業平（ありわらのなりひら）がこの地に寄った時、野老（ところ）（ヤマノイモ科のつる植物）が多く自生した沢が多くあったので「ここはトコロの沢か」と言ったのを伝え聞いて村名としたという説があるらしい。在原業平と言えば、伊勢物語。伊勢物語の昔男（在原業平）が関東に旅する東下りのくだりに地元の話が出てくるのかと読み直してみたが、残念ながら「所沢」の話は書いていなかった（在原業平について調べてみると在原業平が関東東北に下ったことがあるかどうかは実は定かではないとか）。

伊勢物語は在原業平の和歌を軸にそれに少しの文が付いた古典である。和歌について長々と説明を加えるのは野暮でその書かれていない行間を楽しむものらしい。「東下り」も女性関係で揉（も）めて都にいらなくなり、ほとぼりを冷ますために関東東北を旅することになったとか。確かに天皇の孫にあたり、色男の代名詞のような若

い貴族がいきなり僻地を旅するのは「何か」あったからで、いちいち書かれてなくてもそれを察することができて面白い。しかし、筆者は学生の頃古典が大の苦手であり、伊勢物語とか全然分からなかった。高校生に何かを察して楽しめと言われても無理な話だと思う。現在、筆者が書く主な文は研究論文であり、これはすべてに説明を加え、行間を読む楽しみの少ない野暮な文ばかりで、「風流」「粹（いき）」「雅（みやび）」とは遠いところにある。しかし、誰でも分かるように説明されている文章でできているはずの研究論文が実は誰もが分かり難いというのもまた不思議な話である。

さて、伊勢物語の東下りの段には田舎娘が在原業平に送った恋歌がでてくる。

「なかなか恋に死なずは桑子にぞ
なるべかりける玉の緒ばかり」

「桑子（くわこ）」とは農家で飼われている蚕（*Bombyx mori*）のこと。高貴な在原業平に田舎娘が「蚕」に例えた恋文を贈るところが、雅と鄙（ひな）のうまい対比に

なっている。有名な東下りの歌でもあり、いろいろな現代語訳、注がある。

坂口由美子編「ビキナーズ・クラシック 伊勢物語」角川ソフィア文庫(2007)では「中途半端に恋い焦がれて死なないでむしろ、夫婦仲がよいという蚕にでも、なってしまうばよかった。ほんの短い命であるにしても」と。

俵万智(たわらまち)の「恋する伊勢物語」筑摩書房(1993)では「桑子とはお蚕さんのことで、昔からとくに雌雄の仲が良いとされていた。だから人間の恋に苦しむより桑子になったほうがいい」としており、歌としては身近な蚕を使って作ったストレートな恋歌であり、下手でないと解説している。しかし、何故蚕の夫婦(雌雄)の仲が良いのかは説明されていない。

福井貞助「日本古典文学全集 伊勢物語」小学館(1972)では「なまじっか恋いこがれてしんだりしないで、蚕になったら良かった。ほんのちょっとの間でもね。あんなに夫婦仲むつまじく過ごせるのだから」と。繭の中に雌雄が共にこもるといっているので、夫婦仲がむつまじいことのたとえとしている。また、大庭みな子(おおばみなこ)「大庭みな子の竹取物語 伊勢物語(私のこてん)」集英社(1986)では、

「想う心の切なくて、恋に死ぬなら
繭をつくる蚕になりたや短い命」

短い命だけど繭の中に仲良くこもる蚕を引き合いに出した歌は誠にひなびっていて、

田舎娘のいじらしさがあると解説されている。蚕の夫婦が仲良いことを「繭の中に仲良くこもる」と解説しているが、これでは



図1 左の繭が玉繭(同功繭)、右は普通の繭

玉繭(同功繭)になってしまう(図1)。

玉繭の中の蛹は必ずしも雄雌になるわけではない。玉繭が出来る際、幼虫はお互いを認識できないので、雄と雄、雌と雌の玉繭も生じる。また、玉繭は繰糸ができないので玉繭を良しとしたとは考えにくい。当時の蚕品種が如何様なものか記録が残っていないが、玉繭が出現しても数%であろう。ちなみに沖縄諸島の地域蚕品種「琉球多蚕繭(りゅうきゅうたさんけん)」はほぼすべて同功繭になる(図2)。この同功繭は普通の玉繭とは異なり、数頭で一つの繭を作る。このような繭では当然繰糸できず、真綿、紬糸にするしかない。琉球諸島で紬が発達したのはこのような変わった繭を作る蚕品種しかなかったためであろう。平安期の東北では「琉球多蚕繭」のような品種ではなく、普通の品種であったろうから、蚕の夫婦の仲が良いことの由来は玉繭では



図2 琉球多蚕繭の繭

ないだろう。

伊勢物語を現代訳した昭和の文学者や歌人は多分蚕を飼ったことがないのだろう。明治以降、一般の人が蚕の卵を採るのは禁じられていたため、蚕の蛾を見ることは無かった。蚕を蛾まで育てたことがある者が「蚕の夫婦が仲良い」という理由を考えるならば、繭（蛹）ではなく、蚕蛾（成虫）のことがすぐ思いつくはずである。蚕蛾の雌雄は簡単に交尾する。雌蛾から性フェロモンが放たれ、それに雄蛾は激しく反応して交尾行動を示し、雄蛾は尾部に一对のカギ状の爪（捕握器）がついており、これを雌蛾に引っ掛けて雌雄が交尾する（図3）。

普通の昆虫ではこんなに簡単に交尾させ

ることはできない。蚕が如何に家畜化されているのか実感できる点である。雄蛾は交尾するとだいたい15分位で射精する。射精が終われば離れるかと思いきや、交尾を始めると延々と交尾し続ける。簡単に交尾し、交尾し続けて離れないので、確かに蚕の雌蛾と雄蛾は仲が良いのだろう。

蚕の蛾は朝方に羽化するので、採卵する時は蚕蛹を雄雌分けておき、午前中に雄蛾と雌蛾を一緒にすると早々に交尾する。1、2時間交尾させ、昼頃雌雄蛾を離してやる。雄のカギ状の爪で引っかかっているため、雌雄を真っ直ぐ引っ張っても外れない。雌雄をひねると簡単に離れる。離れた雌雄は同じ場所に置くとまた直ぐ交尾してしまうので別々にして、雌蛾は紙の上に置き、産卵させている。雄蛾は生きている間は何度も交尾可能である。モンシロチョウなどでは一度交尾すると他の雄が交尾しようとしても雌は尾部を丸めて交尾を拒否する行動をとる。蚕の雌蛾は交尾済でも雄が交尾してくると拒否行動を取らず、再び交尾する。交尾済の雌蛾と未交尾の雌蛾の見た目の区

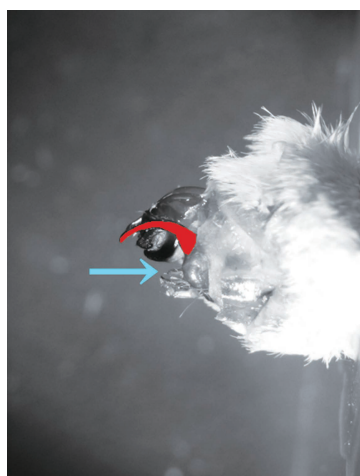


図3 雄蛾の尾部の外部生殖器を側面から見た図
赤く塗った部分が雌蛾を引っかける爪（捕握器） 水色の矢印の先がペニス

別はつかない。雄蛾と同様に雌蛾も何度も交尾可能である。2回交尾すると最初の雄の精子は精子を貯める袋（交尾嚢（こうびのう））の奥に追いやられ、後に交尾した雄の精子が受精に優先して使われる傾向がある。雄は自分の精子が使われるように他の雄と交尾できないように産卵直前まで交尾し続けたいのだろう。

蚕蛾を交尾させ、採卵させるために雄雌を離すことを「割愛（かつあい）」と言う。この「割愛」の作業を教わる時に、「割愛という単語は養蚕用語からきている」と教えられた。長年、養蚕用語と信じていたが、日本国語大辞典（小学館）で調べたところ、確かに養蚕用語とあったが、語源は仏教用語であった。道元（どうげん）の正法眼蔵（しょうぼうげんぞう）行持（ぎょうじ）上に「恩愛の情を断つこと」として書かれているので少なくとも鎌倉時代から「割愛」という単語はあった。では、いつから交尾した雌雄の蚕蛾を離すことを「割愛」と呼ぶようになったのであろうか？ 昭和、大正、明治の養蚕の教科書を遡（さかのぼ）って調べていくと田島弥平（たじまやへい）の「養蚕新論」（明治5年）に「割愛」の単語が使われており、「かつあい」と「はなす」の2つの振り仮名がふられていた。想像であるが、江戸時代後期までは交尾した雌雄蛾は勝手に離れるまで充分交尾させていたが、江戸時代後期に蚕種業が興った際、効率的に採卵するために交尾した雌雄蛾を分けることが始まったのであろう。江戸時代の養蚕書をすらすらと読むことができれば

「割愛」が始まった時期が分かる筈だ。もっと古典を勉強しておくべきだったと痛感する次第である。「蚕の夫婦が仲良い」、そう思っていた先人は交尾している蚕蛾の雌雄を離すことを「割愛」と呼んだのであろう。なかなか教養深く、粋な先人の名前を知りたいものだ。



浮世絵に描かれた桑摘みの風景（再掲）

■横山岳（ヨコヤマタケシ）のプロフィール
東京農工大学農学部
生物生産学科蚕学研究室
〒183-8509 東京都府中市幸町 3-5-8
TEL：042-367-5681
E-mail：ty.kaiko@cc.tuat.ac.jp
HP：http://www.tuat.ac.jp/~kaiko/